

リベラリズムの発展—分配と平等

●ドゥウォーキン: 平等な配慮と尊重への権利

ドゥウォーキン(Ronald Myles Dworkin, 1931-)

1977『権利論』Taking Rights Seriously

1981「何の平等か?」Equality of What?

1985『原理の問題』Matter of Principle

平等主義 egalitarianism

「個別化された政治的目的」「政治的切札」としての権利

社会全体の利益 etc.とのトレードオフを拒否するもの……「横槍」side constraint

資源の平等 equality of resource

生き方の追求による格差は是正しなくてよい。

「選択の運」optional luck

生得の能力格差・偶然による格差は再分配では正する必要。

「自然の運」brute luck

仮想的保険市場・オークションによる正当化

問題……分配対象は生得の能力を含む全体。実際に再分配できるのは獲得された財のみ。

→ 財をどのように移転したら、生得の能力の適切な補償になるか。

解決……「生まれる前に(無知のヴェール下で)保険を購入していた」と考えたら。

薄い無知のヴェール

各人は自らの選好を知っているが、どのような生得の能力を持って生まれてくるかを知らない。その状態で各人が平等な量の貨幣を持ち、保険を購入してリスクに備えるものと想定する。その場合に結果として生じると考えられる分配状況と、現実に所得再分配政策を通じて成立した富の分配状況が一致するなら、そのような政策は正当である。

●セン: 潜在能力の平等

アマルティア・セン(Amartya Kumar Sen, 1933-)

1979『不平等の経済学』On Economic Inequality

1982『合理的な愚か者』Choice, Welfare, and Measurement

1992『不平等の再検討』Inequality Reexamined

1998 ノーベル経済学賞 受賞

厚生の平等批判

財→厚生の変換効率には格差がある。

財の平等は、特に障害者にとって不利に働く。

功利主義批判……「最大多数の最大幸福」で良いか。

幸福は目的であり得るが、人生のすべてではない。

「固定化された困窮」(適応的期待形成)の問題

この問題は、固定化してしまった不平等や貧困を考える場合に、特に深刻なものとなる。すっかり困窮し切りつめた生活を強いられている人でも、そのように厳しい状態を受け入れてしまっている場合には、願望や成果の心理的尺度ではそれほどひどい生活を送っているように見えないかもしれない。長年に亘って困窮した状態に置かれていると、その犠牲者はいつも嘆き続けることはしなくなり、小さな慈悲に大きな喜びを見出す努力をし、自分の願望を控えめな(現実的な)レベルにまで切り下げようとする。実際に、個人の力では変えることのできない逆境に置かれると、その犠牲者は、達成できないことを虚しく切望するよりは、達成可能な限られたものごとに願望を限定してしまうであろう。このように、たとえ十分に栄養が得られず、きちんとした服を着ることもできず、最小限の教育も受けられず、適度に雨風が防げる家にさえ住むことができないとしても、個人の困窮の度合いは個人の願望達成の尺度には現われないかもしれない。(不平等の再検討)

潜在能力アプローチ capabilities approach

財ではなく、それが可能にする可能性(何ができるか?)を平等に
基本的な潜在能力の平等。

「個人の福祉は、その人の生活の質、いわば「生活の良さ」として見ることができる。生活とは、相互に関連した「機能」(ある状態になったり、何かをすること)の集合からなっていると見なすことができる。このような観点からすると、個人が達成していることは、その人の機能のベクトルとして表現することができる。……ここで主張したいことは、人の存在はこのような機能によって構成されており、人の福祉の評価はこれらの構成要素を評価する形をとるべきだということである。

機能の概念と密接に関連しているのが、「潜在能力」である。これは、人が行うことのできる様々な機能の組合せを表している。従って、潜在能力は「様々なタイプの生活を送る」という個人の自由を反映した機能のベクトルの集合として表すことができる。……「潜在能力集合」は、どのような生活を選択できるかという個人の「自由」を表している。」(不平等の再検討)

「…腎臓障害で透析を必要とする人は、所得こそ高いかもしれないが、それを機能に変換する際の困難を考慮すれば、この人の経済手段(つまり、所得)は依然として不足していると言える。貧困を所得だけで定義するのであれば、所得からどのような機能を実現できるかという潜在能力を抜きにして、所得だけを見るのでは不十分である。貧困に陥らないために十分な所得とは、個人の身体的な特徴や社会環境によって異なるのである。」(不平等の再検討)

ロールズ・ドゥオーキン v. セン

ドゥオーキンに対する批判……格差判別の難しさ

何が生き方の追求による格差で、何が生得の格差なのか?

センに対する批判……潜在能力概念の曖昧さ

読み書きする、割礼などの身体切除を避ける、独立したキャリアを歩む自由がある、あるいは、リーダーシップを発揮できる立場に立つ、など。(不平等の再検討)

差異の構造化の問題

固定化してしまった困窮の問題は、不平等を伴う多くのケースで、特に深刻である。このことは特に階級や共同体、カースト、ジェンダーなどの差別の問題に当たる。このような困窮の性質は、重要な潜在能力に関して社会的に生じた差異に注目することによって明らかにできるが、もし潜在能力アプローチを効用の尺度で評価してしまうと、それらの点は明らかにできないだろう。(……)根の深い慢性的な不平等を扱う場合、二つのアプローチから生ずる差は、極めて大きなものになる。(不平等の再検討)

平等な配慮と尊重への権利

自律的・道徳的主体としての尊重。

国家による強制の排除、自律的生活を保障する配慮。

平等な取り扱い equal treatment ←→ 平等な者としての取り扱い treatment as an equal